

## 「西行物語」の成立時期をめぐって

— 絵巻と物語の關係を中心に —

### 一、はじめに

「西行物語」には作者というものを考えねばならぬであろう。しかしそこに語られる主人公西行の像は、決してこの無名氏一人の創造によるとは言えない。そこで私は本稿とは別に、適切な名称も思いつかぬまま、仮に形成者と呼ぶ人々の存在を考察した(注1)。

西行はその特異な存在・往生の見事さ故に、後世多くの憧憬者・支持者を得、彼等により西行は「捨人」の典型的な型を示す人物として受けとめられ、また彼等の実人生営為に規範性を示す人物として仰がれていたと思われる。殊に西行はかねて願望のとおりに釈迦入滅の日に入寂した見事な往生人として、その伝説的人物像が語られていたであろう。この伝説的人物西行の話語る西行憧憬者・支持者を、私は仮に「西

「西行物語」の成立時期をめぐって(坂口)

## 坂 口 博 規

行物語」の形成者と呼んでみたのである。従って作者とは、巷間で語られる西行伝説をもとに、そこに語る伝説的人物西行像を造形してゆく意図的なもの(西行を憧憬・支持し、共感実感の上で虚像を造形してゆく意識的なもの、即ち「捨人」の模範として語ってゆくこと)を汲み取った人物ということになると考えてみた。

「西行物語」は西行入寂の伝を、建久九年二月十五日釈迦入滅の日、京都東山雙林寺にて往生とする。これは俊成・慈円・定家の家集より知る文治六年(建久元年)二月十六日、河内国弘川寺にて往生という正伝に対する、巷間の西行往生談であり、「西行物語」はこうした虚伝形成の意図的なものまでを取り入れていると思われるのである。雙林寺や長楽寺・青蓮院一带は、当時一大別所地帯であったといひ、そこに念仏聖・俗聖が多く集まっていたと考えられている(注2)。

私は福田晃氏の述べられる如く（注<sup>3</sup>）東山雙林寺にて往生という西行入寂の虚伝を言い立てたのは、こうした雙林寺周辺に隠棲する念仏聖達であろうと考えるところから、彼等を「西行物語」形成者の一端に考察した訳である。

「西行物語」の成立をめぐって、背景的なものを上記のように考察してみたが、更に考えておかねばならぬ問題があった。即ち西行歿よりは一体どれ程を経て、現在我々が眼にするような「西行物語」の形がまとめ上げられたのかという、「西行物語」成立時期の問題である。更に「西行物語」は「絵巻」としても伝わっており、この「絵巻」と「物語」の関係についても考察しなければならぬ。

本稿では、この「西行物語」の成立時期、「絵巻」と「物語」の関係等について、私の考えをまとめてみたいと思う。殊に「物語」と「絵巻」の関係であるが、その前後関係については初期の「絵巻」の全容が分らぬので、この点全く仮説・想像説によって考察せねばならぬ。こうした仮説・想像説の是非は当然問題となると思われる。この点も含めご教示ご批判を賜われれば幸いである。

## 二、「西行物語」成立時期の推定

今私が「西行物語」と呼ぶものの内容、その詞章を限定しておかねばなるまい。「西行物語」（以下汎称の意で呼ぶ）の

伝本は『西行物語』『西行一生涯草紙』『西行四季物語』『西行記』『西行物語絵巻』『西行物語絵詞』等々（国書総目録を参照されたい）の名で、かなりの数が伝わっている。

便宜上「西行物語」の伝本は大きく三系統に分類されるように思う。早く久曾神昇氏が『西行全集』（文明社刊）の解題に示された類別が基本になるのではなからうか。本稿では伊藤嘉夫氏の分類（注<sup>4</sup>）をもとにし、「西行物語」の成立について考えたい。

第一類は、『日本絵巻物全集』第十一巻所収の徳川本・大原本（蜂須賀家本）『西行物語絵巻』の詞の系統の、文明十二年奥書『西行物語』（続群書類従巻第九百四十二所収）・『西行一生涯草紙』（史籍集覽所収）の系統

第二類は、静嘉堂文庫蔵伝阿仏尼筆『西行物語』の系統の、正保三年板本・宝永二年板本『西行物語』・神宮文庫蔵『西行法師発心記』の系統

第三類は、海田相保采女絵『西行物語絵詞』の詞の系統の、宝永五年刊『西行四季物語』、天和二年刊『西行和歌修行』の系統

以上の三系統の分類に私も従いたいと思う（注<sup>5</sup>）。

伊藤氏は、第二類は第一類の全文から分量にして約五分の一の内容が脱落、これに部分的に文章や歌の増補が加えられているもの、第三類は詞章の分量では第一類・第二類より少

く、内容は第一類より抜き、更に異本山家集の詞書で増補したもので、室町時代頃の増補かと説かれている。そして伊藤氏は、まず第一類の「物語」が生まれ、一部脱落して第二類の「物語」が成ったと述べられ、特に「西行物語」の成立における「物語」と「絵巻」の前後関係を問題とされ、第一類において初め「物語」として成立、それが絵を得て「絵巻」となったとのご見解をとられている。

本稿では伊藤氏の説かれるところに従い、以下「西行物語」という場合は、先行形態を示すという第一類系統の「物語」の内容、その詞章を対象に考えていることを、前もって述べておきたい。従って「物語」と「絵巻」の関係を以下第一類系統の内容で考えるということになる。

さて「西行物語」の成立時期をどのように考えてみたらよいであろうか。

前に触れたように「西行物語」は、西行の入寂の伝を建久九年二月十五日釈迦入滅の日、東山雙林寺にてかねて詠じた「願はくは」の歌に違わず往生とする。周知の如く西行は、文治六年（建久元年）二月十六日、釈迦入滅の日には一日遅れて、河内国弘川寺で入寂したと伝えられている。従って「西行物語」の成立時期は、こうした虚伝生成の時期をどのように考えるかということにより、改めて考察されるのでは

なからうか。その点で注目されるのは、橘成季著『古今著聞集』の伝える西行往生談であると思う。

『古今著聞集』卷第十三の哀傷第廿一に、「西行法師釈迦如来入滅の日往生せんと願う事」と題する話がある。即ち

西行法師、当時より、釈迦如来入滅の日、終をとらん事をねがひて、よみ待ける、

ねがはくは花のもとにて春しなんその二月のもち月の比

かくよみて、つるに建久九年二月十五日往生をとげてけり。此事をきよて、左近中将定家朝臣、菩提院三位中将のもとへ申しつかはし待ける

もち月の比はたがはぬ空なれどきえけむ雲のゆくゑかなしな

返し

紫の色ときくにぞなぐさむるきえけん雲はかなしけれども

（日本古典文学大系、ルビ等除く）

と見える。

ここに西行の入寂の年時を、「西行物語」と同様建久九年二月十五日釈迦入滅の日と伝えている。入寂地については触れていない。即ち東山雙林寺入寂とは見えない。しかし私は西行入寂の年時を建久九年二月十五日として、その入寂地

を、例えば正伝の河内国弘川寺にするとも思われぬ。やはり建久九年二月十五日という入寂の年時は、序に述べたような、東山雙林寺周辺の別所に隠棲する念仏聖達が言い立てたであろうところの、東山雙林寺にて西行入寂という伝説の伝えるもので、その虚伝は、文治六年（建久元年）二月十六日、河内国弘川寺にて入寂という正伝に対する、巷間の西行往生談であろうと考える。

伝説としての西行往生談の特質は、二月十五日の釈迦入滅の日、かねての「願はくは」の歌に詠じおいた心に違わず往生するという点にある。二月十六日の入寂ではない、まさに二月十五日に入寂するというところに、それもかねての願望どおりであったというところに、西行は後世見事な浄土往生者として一段と高い次元に押し上げられた伝説的人物となつたと考えるのである。『古今著聞集』の西行往生談は二月十五日釈迦入滅の日に往生という巷間の虚伝をもとにした、まさにこうした見事な往生人西行の入寂談といえよう。

この『古今著聞集』の西行往生談に、西行入寂の報を伝える聞いた定家と公衡の間に悼歌が交されたところがある。この贈答歌は、定家の家集『拾遺愚草』に収められている。即ち

建久元年二月十六日西行上人身まかりにけるをはり乱れざりけるよし聞きて三位中将のもとへ

望月の頃はたがはぬ空なれど聞えむ雲の行方悲しな

上人先年詠云

願はくは花の下にて春死なむその二月の望月の頃  
今年十六日望日也

かへし

紫の色と聞くにぞ慰むる消えけむ雲は悲しけれども

（『統国歌大観』所収六家集本）

とある。

もし成季が『拾遺愚草』を眼にしていたとすれば、当然入寂の年時を建久元年二月十六日と知ったはずである。更に何らかの形で河内国弘川寺入寂と知ったとしても、『古今著聞集』が西行入寂の年時を建久九年二月十五日としている以上、やはりこの西行往生談は巷間の虚伝によって書かれたものと考えるのが自然と思う。成季が仮に建久元年（文治六年）二月十六日、河内国弘川寺入寂を知ったにしても、西行往生談に正伝を書かなかつたのは、当時正伝がかなり信憑性薄いものとなっているかあるいは一部の人々へのみ伝えられるものであって、二月十六日ではない、まさに釈迦入滅の十五日に願いどおり見事に往生という虚伝の方が、一般に信じられ語られていたと考えられるのではないだろうか。

前に述べた如く、私は「西行物語」が今見るような形（あくまで虚伝を語るという点において）になる時期を、建久九年二月十五日、東山雙林寺入寂という虚伝生成の時期の推定

(臆測の域を出まいが)の上で、改めて考察されると思うのである。

『古今著聞集』の跋文に

建長六年十月十七日、宴後朝、右筆記之。当時凍雲片々、青嵐漠々、滿籬之殘菊、黄紫交色、引砌之小泉、鴛鴦雙翅、閑庭之物、足動我情一者也

朝請大夫橘成季

(日本古典文学大系)

とあることから、その成立は建長六年(一一五四)と分る。従って、西行入寂の虚伝はこの頃までに生成していたことになると思う。このことから、西行入寂の虚伝を語る「西行物語」が成立する時期を、まずは『古今著聞集』成立の建長六年前後と把握することが出来るであろう。

ところで谷山茂氏は、『藤門雜抄』第一冊(大阪市立大学蔵)に、「建長三年七月七日於十方院西隔屋書写」という奥書のある、「西行発心修行物語」と題する片仮名本の古写本の存在を報じていることを紹介されている(注6)。即ち

藤門雜抄第一冊(大阪市立大学蔵J一五三七五)によれば、「西行発心修行物語」と題する片仮名本の古写本があったことを報じている。同書は、表紙とも四十二丁の横本で、高山寺宝性院および仁和寺直乘院の印があり、初行には「鳥羽院ノ御時北面ニメシツカハシケム左兵衛

「西行物語」の成立時期をめぐって(坂 ロ)

尉藤原章清（ちやうせい）トイフ武者アリケリ」、奥には「建長三年七月七日於十方院西隔屋書写」とあり、また古体の片仮名が用いてあったということである。とすれば、西行物語はすくなくとも建長三年(一一五二)以前には成立していたことになる。と述べておられる。

この「西行発心修行物語」の内容が、現在我々の眼にするような第一類系の「物語」と同じ形をとるものか否か分らない。しかし私は『古今著聞集』成立の建長六年頃まで西行入寂の虚伝が生成と考え、そこで「西行物語」の成立時期を建長六年前後と把握したことから(仮説に仮説を重ねることになるが)、極めて時間的に近いこの建長三年書写と伝える「西行発心修行物語」は、「表紙とも四十二丁の横本」とあり「絵巻」とも思えぬので、今知り得る限りでは最も古い「西行物語」の存在と考えたい(西行往生談のこのみでかくの如く断定するのは甚だ疑問であるが、一応私はこのように考えたい)。谷山氏のご見解にあるように、建長三年以前として西行歿よりは約六十年頃までに、現在我々が眼にするような第一類系の「物語」の形が出来たのではないかと思う。

虚伝生成の時期の下限を考えたところから、「物語」の成立時期を建長以前としたが、しかし上限の、即ち一体いつ頃

から虚伝が語られたのかということとは全く分らない。つまりは「物語」成立時期の上限を考えることが出来ないということであるが、私は建長以前のそれ程遡らぬ頃、大体十三世紀中頃の成立と考えてみたいと思う。

### 三、「西行物語絵巻」について

今「西行物語」の成立時期を建長以前と把握してみた。ところで「西行物語」は「絵巻」としても伝えられている。一体この「絵巻」はいつごろ成立したのであろうか。

そこで前に触れた著者成季が『古今著聞集』に西行往生談を書く上で、定家と公衡の悼歌贈答のことを知った経緯、さらには西行入寂の虚伝を知った経緯というものを私なりに考え、「絵巻」成立時期について一つの考え方を求めたいと思う。定家と公衡の悼歌贈答のことは「西行物語」にも語られる。西行入寂の後日談として、高野山天野別所で西行の妻・娘もそれぞれ往生をとげるとの話がある。文明十二年奥書『西行物語』によると、

されば三人同じ蓮に身をうかぶべきことこそ有難くおぼゆれ。その後都に聞えつつおのおの涙にむせびて往生の志ふかくなりければ、かの人々故に往生をとぐる人あまたありにけり。其中に右近中将定家の朝臣、菩提院の三位の許へ、西行が往生のことを申されけるに、

望月のころはかはらぬものなれど消えけむ空の夕かな  
しな  
紫の色ときくにもなぐさむる消えけむ雲は悲しけれど  
も

（『西行全集』以下同）

とある。同系の一本『西行一生涯草紙』には、二首の間に「返事 公衡」と入っている。

ここで『古今著聞集』と「西行物語」の関係を考えねばなるまい。私は成季が西行往生談を書く上で、定家と公衡の贈答・西行入寂の虚伝をそれぞれ知る経緯とするよりも、これらを一つに考え、即ち西行入寂の虚伝に定家と公衡の悼歌贈答のことを共に語る西行往生談を知った経緯として考えた方がよいと思うのである。今考えてきたように、『古今著聞集』成立以前に「西行物語」が成立していたとすると、成季が「西行物語」を眼にして西行往生談を知ったと考えることも出来るであろう。私は『古今著聞集』の西行往生談が、西行入寂の虚伝に定家と公衡の悼歌贈答のことを共に語る形をとるのは、著者成季が「西行物語」を眼にし、それを参考にして西行往生談を『古今著聞集』に書いたと考える方が、虚伝・悼歌贈答のことをそれぞれ知る経緯というものを考えるより理解しやすいと思う。しかし成季が「物語」によって知ったとしてもよいが、あるいは「絵巻」によって知ったと考

えることも出来るであろう。

現存の「絵巻」でも最も早い時期の成立と考えられる徳川本・大原本『西行物語絵巻』二巻は残欠絵巻であり、その元首尾揃ったものの内容は分らない。同系の、即ち現在我々が眼にする第一類系の「西行物語」と同じ内容であるか否か不明であり、特に西行の往生談があるか否か、あったとしてその入寂の伝を何と伝えるか全く分らない。虚伝を語るという点に関していえば、現存二巻の『西行物語絵巻』の元首尾揃ったものの製作の時期に虚伝が生成していたならば、その「絵巻」が虚伝を語るという可能性もあろう。虚伝を語る「絵巻」が建長六年以前に成立、流布しており、それが定家と公衡の悼歌贈答のことを共に語る形であるならば、成季は「絵巻」によって西行往生談を知り、それを『古今著聞集』に引いたと考えることも出来よう。橘成季の伝記はよく分らないという。琵琶と絵画を好んだ下級貴族の一人であったらしい(『新版日本文学史』・中世』二〇八頁)という。この絵画を好んだということがどういふことか私には分らないが(『古今著聞集』序に「凶画者愚性之所好也」とあり、また「成誂三画工、略呈三振古勝槩」とある)、あるいは絵巻も好んで享受していたということでもあるならば、西行往生談を「物語」よりは「絵巻」で知ったと考えた方がよいかもしれぬ。勿論臆説にすぎぬが、私は建長六年頃までに、「西行物

「西行物語」の成立時期をめぐって(坂口)

語絵巻」が成立していたと見るその可能性を、ここで考えておきたかったのである。ここにおいて、まず「西行物語絵巻」の成立時期と「西行物語」の成立時期の前後関係、即ち初め西行の物語はいかなる形で成立したのかが問題となる。

ところで先学より徳川本・大原本『西行物語絵巻』二巻について、絵の画致、詞の筆致からその成立時期への考察が与えられている。

早く田中一松氏は『日本絵巻物集成』第十一巻の解題で、「まずは弘安は下り得ないであろう」と述べられ、この田中氏のご見解を引いて久曾神昇氏は『西行全集』の解題で、「文永弘安頃とするのは適当であろうと思う」と述べられている。また久曾神氏は大原本の奥に「右絵草子一卷、言葉書者為家卿御真筆無疑者也」とある点で、

この詞書は果して為家であるか疑問である。古筆家に於ては、平安時代末乃至鎌倉時代初期のものを、寂蓮、雅経、良経と称し、その次の時代のものを多く為家と称するのであり、鎌倉中期の能書家の手になるものに対する符牒と考へられる。とまれその筆致よりして、私は文永乃至それ以前であらうと思ふ。従つて西行歿後七十年位にして成ったものであらうと思ふ。

と述べておられる。前に私は「西行物語」の成立を建長以前

と考えているので、今この見方に立てば「絵巻」は「物語」の後の成立と考えることになる。

また白畑よし氏は『日本絵巻物全集』第十一巻の解説で、現存二巻の『西行物語絵巻』の「リアルな表現、つまり写実力にきたえ上げられた達筆さ」は、後白河法皇の時に命を受けて宮中絵所で製作された『年中行事絵巻』に相通ずる趣がある」と述べられ、平安朝末以来のやまと絵正統画系の画境、その享受に触れて、次いで

この西行物語絵巻は、そうした点から、承久以前の即ち鎌倉前期に、宮中を中心とする公家の階級を背景として、正統の画系を継ぐ一流の画家によって生み出された絵巻の一つと認めて差支えないと思われる。

と述べられている。又詞の筆者を藤原為家と伝える点について、白畑氏は

恐らく為家でないにしても、その書風を持つ人の手になつたことは疑いないであろう。かように詞書の上から考えても、またこの西行物語絵巻の製作期が、十三世紀の半ばを降らないということが出来よう。

と述べられている。徳川本・大原本『西行物語絵巻』二巻の元首尾揃ったものの製作時期を「承久以前の即ち鎌倉前期」とすると、文治六年の西行歿よりは約三十年頃まで「絵巻」成立ということになる。『物語』の成立を建長頃までと考

えるとすれば、即ち「絵巻」が前で「物語」が後となる。

こうした先学のご見解に、前より考えてきた「物語」成立時期を建長以前とする私の仮説を結びつけて、短絡的に「絵巻」と「物語」の前後関係を考えることは出来ない。

ここにおいて「絵巻」と「物語」の前後関係を問題とし、その関係の上で、私は現存の徳川本・大原本『西行物語絵巻』二巻の元首尾揃ったものの製作時期を考察したいと思う。

徳川本・大原本『西行物語絵巻』(以下『絵巻』と略す)二巻が、西行の物語として最初に製作された「絵巻」の残欠であるか否か不明であるが、一応私はこの現存二巻の『絵巻』製作時期をして、最も早い「絵巻」成立時期と考えておきたい。また「物語」としては、先行形態を示すという第一類系の文明十二年奥書『西行物語』(以下『物語』と略す)の内容、その詞章を比較の対象にしたい。特に文明十二年奥書『物語』を取り挙げた理由はないが、同系の一本『西行一生涯草紙』より古い形を示すと思われたので、現存二巻の『絵巻』との比較の対象にとり挙げた。こうした現存の「絵巻」と「物語」の関係を比較検討し、その上で「絵巻」の成立時期を私なりに考えてみようと思う。しかし私は具体的な年代を挙げて、その成立時期を求めることは出来ない。「西行物語」の成立時期(即ち今述べた如く現存の文明十二年奥書『物語』の形がまとめ上げられた時期とする)を、私は建長



以前のそれ程遡らぬ頃と考えているので、つまりその「物語」成立時期より前か後かということをおなりに考えてみたのである。そうしたところで、私なりに現存二巻の『絵巻』製作時期、即ち「西行物語絵巻」の成立時期を考えてゆくことになると思う。

#### 四、資料としての現存『絵巻』二巻

ところで対象とする徳川本・大原本『絵巻』二巻であるが、私は現存二巻はそれ自体が初めて製作されたものの形をとる残欠絵巻とは思わないのである。故に現存二巻の『絵巻』の内容その詞章を、第一類系の「物語」と「絵巻」の關係を考える上で、そのまま対象として利用出来ぬと思われる。特に大原本『絵巻』が問題となる。徳川本『絵巻』も問題となるところがあるが、こちらは詞章上に問題はないと考えている。そこでまず現存二巻の『絵巻』の内容その詞章を検討したい。

まず徳川本『絵巻』を検討すると、その本文は、

いまだその期や来たらさりけん二月□すき七月に又おもひきりて月のおもしろかりしにかくそよみし

(三首略)

(『日本絵巻全集』第十一巻、以下同)

「西行物語」の成立時期をめぐって(坂口)

と始まっている。

「西行物語」(第一類系以外の二・三類系も同様に)は、話の筋の上では、この前に、北面の同僚で相親しい佐藤憲康(第二類系では「同族」とある)の突然の死、それ故に西行、在俗時佐藤憲清は鳥羽院出家の暇を言上するため馬をすすめるとなっている。徳川本『絵巻』はこうした話がなく、出家の暇を鳥羽院に言上し、それから出家の機会を求め二月も過ぎ七月になったという話から始まる。

しかし徳川本『絵巻』は詞は欠いているものの、憲清が頭の弁を通じて鳥羽院へ出家の暇を言上するところを描く絵がある。問題はその絵の位置である。

徳川本『絵巻』と同系の文明十二年奥書『物語』で当面の筋を追ってみると、北面の同僚の憲康と前夜「朝は必ず殊にきらめきて参り給へ、打ちつれ侍るべきよし申し」合わせ、翌朝憲清が憲康の館へ誘いに行くと、憲康は夜の内に死んでおり、そこで憲清は一挙に無常の淵に立たされる。

いよいよかきくもる心地して、風の前の燈、蓮の浮葉の露、夢のうちの夢と覚えて、やがてこゝにて髻を切らばやと思へども、今一ど君にも暇をも申してと思ひて、駒をはやむれども、袂の涙せきあへず。

とあるように、憲清は出家の暇を鳥羽院へ言上するため憲康の館より馬を走らせる。そして頭の弁を通じて出家の許可を

得た憲清は、鳥羽殿より退出する。

御うちより出で、帰りし道にて思ふやう、抑さても過ぎぬる二月に出家は一定と思ひさだめて、かくすさみしぞかし。

空なる心は春の霞にて世にあらじとも思ひたつかな  
いまだその期や来たらざりけむ、二月も過ぎて七月に又思ひきりて、月の面白かりしにかくすさみしぞかし。

(三首略)

とある。憲清が鳥羽院へ出家の暇を言上するのは大治二年(実際にはこの年西行十歳である)十月十一日以降のことと語られており、ここで憲清がなかなか出家に踏み切れずにいることが分かる。そしてここにおいて、前に引いた徳川本『絵巻』の冒頭が叙述されていることも分かるであろう。

次いで話は西行出家談に移り、西行が出家の決意を固めるために幼い娘を縁より下へ蹴落すという話が続く。以下の筋は徳川本『絵巻』と文明十二年奥書『物語』は同じ(詞は違ふ)なので省略する。こうした展開に従い徳川本『絵巻』の絵の内容を追うと、(一)幼い娘を縁より蹴る憲清、(二)一晚出家家の別離を妻に語る憲清、(三)その暁に髻を切る憲清、(四)出家のため嵯峨の聖の許へ赴く憲清、(五)嵯峨の聖に出家の志を語る憲清、(六)剃髪する憲清、(七)出家して庵住する憲清(西行)、その庵の近くで洗濯する女達の姿が描かれている。そして前

に問題とした鳥羽院へ出家の暇を言上する憲清の姿が、この(七)西行庵住の場面に続いて描かれているのである。

詞は欠いているものの、話の筋から言えばこの鳥羽院への出家の暇言上の場面は、徳川本『絵巻』の最初に位置しなればなるまい(注7)。この場面即ち(七)以下に続く場面は、(八)宮中の門前で憲清の出家をささやく供人達、(九)宮中門前警護の武士達を描き、(十)頭の弁を通じて鳥羽院に出家の暇を言上する憲清の姿が描かれている。徳川本『絵巻』の(七)以下の描写を見ると、第十一紙と第十二紙(『日本絵巻物全集』第十一巻より)の継ぎ目の所で、一応嵯峨で剃髪した憲清出家後西行が庵住する場面と、頭の弁を通じて鳥羽院に出家の暇を言上する憲清の姿を描く場面が分れる。そしてこの継ぎ目を横切つて背景(絵の中程)に山が描かれており、一続きの絵の如き観を呈している。

こうした二つの場面は元は別々の所、即ちあるべき位置にあったものと考えると、今見るような形になった理由を二通り考えることが出来る。まず一つは現存の徳川本『絵巻』は模写絵巻であり模写される段階で何らかの意図的なものがあって今見る形にされたとする見方である。ところで徳川本『絵巻』の第十一紙と第十二紙の絵を見ると、第十一紙の西行の庵居と、第十二紙の馬の絵が不自然に描かれているように思う。あまりに両者が接近しすぎており、また大きさが

不自然である。そこで後世何らかの理由で徳川本『絵巻』の各々の紙が切れ、それをつなぎ合わすということがあったとする。同じ山を描いている鳥羽院への出家言上の絵と西行庵住の絵があり、その山をつなぐため、山の高さを合わせて紙の端に切られ、その上ではり合わせて今見る形にしたとする。とすれば庵居と馬の姿が接近する理由となる。即ちもう一つ今見る形となった理由として、後人の手がいって間違えて接合されたという見方である。

こうした疑問は大原本『絵巻』についても考えられる。

大原本『絵巻』は、西行出家の後庵住し、やがて「流浪の行」に出ようと思いたち、吉野・やがみ王子・千里浜と修行、熊野から大峯、下山して住吉へ回るといふ話である。問題となるのは、熊野・大峯修行のところである。『日本絵巻物全集』第十一巻所収大原本『絵巻』の詞でいえば、第五段と第六段の間に、同系の文明十二年奥書『物語』では西行の那智滝修行・大峯修行の話が語られているが、この話が大原本『絵巻』にそっくり無いのである。

今第五段の全文と第六段の冒頭部分を引いてみよう。

#### 第五段

かくてまといありくほとに登蓮法師人をすゝめて百首のうたあつらへけれといひ申て熊野へまいるみち紀伊国千里のはまのあまのとまやにふしたりける夜の夢に三位

「西行物語」の成立時期をめぐって(坂 口)

入道俊恵など申ていはくむかしにかはらぬ事は和歌のみちなりこれをよまぬ事をなけくとみておとろきてよみておくりけるにこのうたをかきそへてつかはしける  
すゑの代もこのなけきのみかはらすとみしゆめなくはよそにきかまし

#### 〔絵〕

#### 第六段

このいはやにて往生をとけはやとおもひけれとも先達ゆるさよりければこころならすいてつらなりてゆくほとに大和国まちかくなりて人さとわつかにみえて——下略とある。

文明十二年奥書『物語』にはこの第五段と第六段の間に、那智滝修行・大峯修行の話がある。那智滝修行の話は次のとおりである。

御山千手の滝に入堂する程に、常住の僧申していはく、この上に二の滝三の滝とてめでたき滝おはします——中略——是は二の滝如意輪の滝となむ申す。をがみ参らすれば、誠にうちかたむきたる様にながれたるやう、いよいよ尊く覚えて、涙もとどまらず、心のうち澄みてをがみたるるゝその御前に、花山院の御庵室の御跡のはべりけるに、前に年ふりたる楼の枯れむとするを見て、

木の下に住家とすればおのづから花みる人になりぬべ

きかな

と詠ませ給ひけるのは、こゝやらむと思ひてかくぞながめける。

わきて行む老木の花もあはれなり今いくたびか春にあふべき

とある。この那智千手滝・如意輪滝修行の話は、『山家集』中巻雑部の

924このもとにすみけるあとをみつるかなちのたかねの花を尋ねて

（日本古典全書、数字は同書による、以下同）

の詞書と、同じく『山家集』上巻春部の

ふる木のさくらの、ところどころさきたるをみて

105わきてみむ老木は花もあはれなりいまいくたびか春にあふべき

をふまえて、新たな構想をとって叙述されたことが分かる。

また大峯修行の話を文明十二年奥書『物語』は、

この山に年久しくこもりて、

南無帰命頂礼、日本第一大りやう権現、那智の御山、

三重はくせき大悲大きやうし、飛滝権現、飛滝薩埵、

慙愧懺悔、六根罪障

と念願し、あはれあはれ心有らむ先達もがな。一度も見  
る人は皆菩提の宝所に至るなり。大峯へ入らむと思ふ所

にここに僧南坊の僧都、その時二十八度先達にて申すやう入らむと思し召さば入らせ給へ。大峯の秘所どもをがませ参らすべき由申されければ、よろこびて入りける程に、哀れさこそと覚えけめ。俄に墨染をぬぎてかへて、山伏の装束になりて大峯に入りぬ。

とあり、以下深仙・あづまや宿・千種嶽等々をめぐり修行を重ね、笙の岩屋へ至ると語られている。

この大峯修行の話は、『山家集』中巻雑部・下巻雑部に見える大峯入りの歌とその詞書をふまえて叙述されている。例え

ば  
深山と申す宿にて月の面白くありければ、

深き山に澄みける月を見ざりせば思出もなき我身なら

まし

をばが峯といふ所を見渡せば、思なしにやありけむ。月の殊にあかく見えければ、信濃の国ならねども、名にし負ひてかく程面白き月はすむやらむとて、

をばすては信濃ならねどいづくにも月すむ峯の名にこそありけれ

あづまやと申す宿にて、時雨の後に月面白かりければ、  
神無月時雨はるればあづまやの峯にぞ月は澄むと澄みける

とあるところは、『山家集』下巻雑部の、

大みねの神仙と申す所にて月をみてよみける

1191 ふかき山にすみける月を見ざりせば思ひ出もなき我が身  
ならまし

をはすての峯と申す所の、みわたされて思ひなしにや  
月ことに見えければ

1194 をばすては信濃ならぬどいづくにも月すむみねの名にこ  
そ有りけれ

あづまやと申す所にてしぐれののち月をみて

1198 神無月しぐれはるればあづまやの峯にぞ月はむねとすみ  
ける

の詞書と歌をふまえて叙述されており、また

平等院の僧正の千日籠の時、

草の庵何露けしと思ひけむもらぬ岩屋も袖はぬれけり  
と詠ませ給ひけることも今見る心地して、今生の悪業煩  
悩も明王の火炎に燃え失せぬと覚えて、涙止まらずして、  
露もらぬ岩屋も袖はぬれけりと聞かずば如何にあやし  
からまし

この岩屋にて往生をとげばやと望み申しけれども、先達  
ゆるさざりければ、心ならず出でつつ行く程に、大和の  
国ま近くなりて——下略

とあるところは、『山家集』中巻雑部の

御嶽より笙のいはやへまゐりけるに、もらぬいはやも  
とありけむをりおもひいでられて

999 露もらぬいはやもそではぬれけりときかずはいかにあや  
しからまし

とあるのをふまえて叙述されていると思われる。そして今引  
いたところに見る、西行が笙の岩屋で往生を望むと先達の僧  
南坊僧都が許さなかつたという話から、大原本『絵巻』の第  
六段が始まることが分かるであろう。即ちそれ以前の那智滝  
修行大峯修行の話が欠けているということになると思われ  
る。

私は大原本『絵巻』の内容が元々の形であるとは思われな  
い。やはり第五段と第六段の間に脱落があると思うのであ  
る。即ち大原本『絵巻』の元々の「絵巻」には那智滝修行・  
大峯修行の話があったと考えるべきであろう。ここで徳川本  
『絵巻』同様に、大原本『絵巻』が模写される段階で、この  
二つの話を何らかの理由で欠いてしまったとする見方と、  
もう一つ後世何らかの理由で大原本『絵巻』第五段と第六段の  
間、第十八紙と第十九紙（『日本絵巻物全集』第十一巻より）  
の間を欠いて接合されたとする見方の二通りが考えられよ  
う（注8）。

以上のように私は現存の徳川本・大原本『絵巻』二巻を共

に模写絵巻とする見方と、後人の手で今見る形に接合されたとする二通りの見方がとれるように思う。にわかになどちらと断定出来ないが、前の徳川本『絵巻』の第十一紙と第十二紙、大原本『絵巻』の第十八紙と第十九紙の幅が、他の紙幅の平均的な長さより短かく、その特異な点に留意して、私は一応後者の見方をとりたいと思う。

このことから私は即座に現存二巻の『絵巻』を同系の文明十二年奥書『物語』に比較し、その相違から第一類系における「絵巻」と「物語」の前後関係というものを考えることは出来ないと思うのである。特に私は今述べたような大原本『絵巻』の内容と文明十二年奥書『物語』の内容の相違からは、その前後関係についての仮説は求められぬと思う。となれば徳川本『絵巻』は絵の位置に問題はあるが詞章上には問題がないので、結果として、徳川本『絵巻』の内容その詞章の範囲内で文明十二年奥書『物語』の内容その詞章を比較し、その上で一応第一類系における「絵巻」と「物語」の前後関係についての仮説を求めねばなるまい。

#### 四、「絵巻」と「物語」の前後関係

徳川本『絵巻』の内容は、前に述べた如く、西行出家談が中心となっている。そこに西行が出家の決意を固めるため幼い娘を縁より蹴落すという話がある。これを文明十二年奥書

『物語』と比較してみると、そこに登場する西行妻女の像に相違が見えるのである。

これこそは煩惱のきつなをきるとおもひて縁よりけをししたりければなきかなしみけれともみよにもきよいれすして中に入ぬ〔絵〕されは名利の世をのかれ生死のきつなをはなれて戒行を具足して念仏往生のみちにおもむかんと思ふ月も西のやまのはにかたふきぬれはいまはかりとおもひさためつゝこしかたゆくすゑのちのよまてさま——かたらへともおんなはうらみもなけきもひとかたならずおもひみたれてさらにもものもいひやらすたゝなくよりほかのことなしてし□ととまるへきことならねはみつからもとよりをきりて——下略

（徳川本『絵巻』第一と二段、傍線筆者）

これこそ煩惱の絆よと思ひとり、縁より下へ蹴おとしたりければ、泣き悲しみたることも耳にも聞きいれずして、うちにいりて今夜ばかりの仮の宿ぞかしの思ふに、涙にむせびてぞあはれに覚えける。女房は男には猶まさりける人にて、かねてより男の出家せんずることを悟りて、この娘の泣き悲しむを見ても驚く気色のなかりけるこそあはれに見えけれ。——中略——西の山は近く月傾けば、今を限りと思ひて、年来妻男にあるべき事さまさまにちぎれども、この女房さらに返事することなし。さ

りとてもとどまる事ならねば心強く思ひて、髻を切りて  
——下略

(文明十二年奥書『物語』、傍線筆者)

徳川本『絵巻』によれば、西行妻女は「たゞなくよりほかのこと」の出来ぬ女性である。夫から出家の志を聞き、歎き悲しみ取り乱して、その志を留めることも理解することも出来ぬ。「ものもいひやらす」とはそのためであろう。しかし文明十二年奥書『物語』の伝える西行妻女は「男には猶まさりける人」となっている。夫に出家の志を告げられ、また年来の夫婦の絆について様々に語っても、妻は「さらに返事することなし」ある。私はこれは徳川本『絵巻』の如く取り乱して「ものもいひやらす」というのとは違ふと思う。そこにはかねてより夫に出家の志あることを悟り、今はそれを告げられても歎き悲しむこともなく、覚悟を定めていたから今更出家を留めることもあるまいと思ひ、「返事すること」がなかつたのではないかと考へたい。故にこそ西行は後のことを妻にたくし、「心強く思」つて出家出来たと物語っていると思う。

こうした『絵巻』と『物語』の伝える西行妻女の像の相違を、私は「絵巻」と「物語」の前後関係等を考へる上で、以下のように理解したいと思う。

「西行物語」(以下『西行全集』より)、は第一・二・三類

「西行物語」の成立時期をめぐつて(坂口)

全て妻も出家し(第一類系は、西行が出家したその日のうちに様をかえ、一・二年娘と京にいたとし、第二類系は西行出家の後やがて様を変えんとする。共に妻二十三歳の時出家とする)、尼となつて高野天野別所に行くとする。そして九条民部卿藤原顕頼の娘冷泉殿の養女になつていた娘も、十七歳の時父西行の切なるすすめに従ひ出家、母の居る天野別所を尋ね行き、そこで二人共行い澄まし、やがてそれぞれ往生(娘の往生を第一類文明十二年奥書『物語』は正治二年二月十五日歿とし、第二類では正保三年板本『物語』は正治一年八月彼岸の頃、神宮文庫蔵本『西行法師発心記』は正治二年八月彼岸の頃とする)という話になつている。

私は「男には猶まさりける人」という西行妻女の像は、こうした妻・娘二人の出家・往生談の構想の上で求められた性格ではなからうかと思う。そして私はこの性格決定は、「西行物語」がその構想上に、鴨長明の『発心集』第六の「西行女子出家事」の話をつねとして取り入れたために成つたものと思ふのである。この「西行女子出家事」には西行妻女と娘の往生までを語らぬが、二人それぞれ出家し天野別所へ行くと伝えている。「西行物語」の詞章は明らかにこの「西行女子出家事」の詞章をふまえて叙述されている。このことは単に詞章上の問題に留まらぬと思う。私は「西行女子出家事」を構想上にたねとして入れることが、後々西行妻女・娘は天

野別所で往生という話までを語り、「西行物語」全体が聖西行・妻・娘三人の恩愛不能断を主題とする、その構想自体とも関わるということの問題としたいと思う。

果して徳川本『絵巻』（及び大原本『絵巻』）の元々の「絵巻」製作の段階で、『発心集』の「西行女子出家事」の話が構想上に入っていたか否か、即ち西行の妻・娘各々の出家を語り、更に天野別所で二人それぞれ往生という構想をとっていたか否か、現存二巻の『絵巻』が残欠絵巻であることから全く不明であるが、とまれ第一類系において「物語」（例えば文明十二年奥書『物語』の形）が成立する上で、『発心集』の「西行女子出家事」との関係は問題とせねばなるまい。

私は以上述べた西行妻女の像の性格の差から、増補という視点に立って、第一類系の徳川本『絵巻』と文明十二年奥書『物語』の前後関係について、次のような仮説を求めたいと思う。即ち私は初め徳川本『絵巻』が製作され、ある時期にその「絵巻」の詞に新しい構想にともなう詞章を増補し、現在我々が眼にするような、聖西行の発心から往生までの法臘五十年の「物語」、つまり文明十二年奥書『物語』の形が成立したと考えたいと思う。

仮に「物語」が前で「絵巻」が後、即ち省略という視点に立って考えると、私には西行妻女の像が「男には猶まさりけ

る人」から「たたなくよりほかのこと」の出来ぬ女性への変貌は理解しにくいのである。つまり「物語」で固定化した「男には猶まさりける人」という妻女の像が、「絵巻」製作の上で性格を変えたとすれば、それは「物語」の構想をも変化させることにもなると思われるからである。

徳川本・大原本『絵巻』二巻の元の「絵巻」の内容が分らぬ以上、こうした構想の問題まで論じることは出来ないと思うが、更に別の視点から、「絵巻」を前「物語」が後とする考え方を求めてみたいと思う。即ち西行の法臘五十年の物語に、その妻・娘の天野別所往生談が共に語られてくる所以というものを考えたいと思うのである。

前に触れたように、『発心集』の「西行女子出家事」に往生までは語らないが、西行の妻・娘がそれぞれ出家し尼となつて高野山天野別所へ行くと語られている。この「西行女子出家事」は事実関係が考察されている<sup>(注9)</sup>。確証はないが二人がそれぞれ天野別所で往生という話も本当かもしれぬ。問題はこの話が、西行関係説話として伝承されていたのではなくかと思ふ。

私は高野山天野別所に関係する説話伝承者<sup>(注10)</sup>（具体的には私は分らぬ）が、西行関係説話として西行の妻・娘の天野別所往生談を巷間で語り伝えており、その話が「物語」成立の上で構想に加わったということではないかと考えるのであ



る。即ち雙林寺で西行入寂という虚伝、天龍川で荒くれ武士に額を割られるという伝説等と同じく、「物語」が無名氏の手で聖西行の法臘五十年の生涯が一代記風にまとめ上げられる上で、構想上に取り入れられた巷間の伝承の一つとして、私は西行の物語にその妻・娘の天野別所往生談が共に語られてくる所以を考えたいと思う。

こうして現在我々が眼にする「物語」の形が出来るならば、初めの「絵巻」には天野別所の話がなかった(妻・娘のことが語られていても今見る形と違う)ということになるのではなからうか。前に触れたような徳川本『絵巻』と文明十二年奥書『物語』における西行妻女の像の相違ということも併せ考えると、私は徳川本『絵巻』(大原本も含め)の元首尾揃った「絵巻」は、西行関係説話としての妻・娘の天野別所往生談が共に語られる話ではなかったからこそ、つまり『発心集』の「西行女子出家事」が西行の物語の構想上に取り入れられることがなく、故に前に見たような「たたくりほか」のことが出来ぬ女性として、西行妻女の像が語られているのではないかと考えるのである。「絵巻」に妻・娘のことを語る基本的な形(全体は不明であるが、例えば出家に際し幼い娘を縁より蹴落すという話等)があり、後にそうした話に巷間の西行関係説話としての妻・娘の天野別所往生談が加わり、そこで作者が『発心集』の「西行女子出家事」を

たねとして取り入れ、現在我々の眼にするような聖西行の法臘五十年の生涯を語る「物語」の形をまとめ上げたと思う。

既に(西行歿後二十年から三十年の間に『発心集』が成立したとして)西行の妻・娘が天野別所へ行くという話を語る『発心集』の「西行女子出家事」は、頼りとなる好資料として作者に受けとめられ、そこで詞章上にとり入れ、また全体の構想にも関わるものとして、ここに西行妻女の像に「男には猶まさりける人」という性格を与え、娘については西行が出家後も常にその境涯に心を配る恩愛断ち切れぬものとして、共に出家して天野別所へ行き、その地で往生という話をまとめ上げ、現在我々が眼にする「西行物語」の形が出来たと考えられると思うのである。

以上のように私は徳川本『絵巻』と文明十二年奥書『物語』における西行妻女の像の相違、西行の物語にその妻・娘の天野別所往生談が共に語られる所以というものを考え、一応第一類系において初め「絵巻」が成立し、後に詞を独立させそこに新しい構想にともなう詞章を増補して、現在我々の眼にする「西行物語」の形が成ったと考えてみたいのである。

前に私は『古今著聞集』の西行往生談から、建久九年二月十五日、東山雙林寺にて入寂とする虚伝は、『古今著聞集』成立の建長六年(一二五四)頃までには生成していたであろうと考え、そこで谷山茂氏がご紹介された建長三年書写と奥

にある「西行発心修行物語」を、極めて時間的に近いことから、現在知り得る限りでは最も古い「西行物語」の存在を示すものと考え、以上の点から私は大体建長頃までに「西行物語」が成立と考えてみた。私は「絵巻」の成立時期については全く分らない。美術史の上で考察せねばなるまいが、私はこの点については何ら分らぬ。現存の徳川本・大原本『絵巻』二巻の絵の画致・詞の筆致から、前節で触れたように現存二巻の『絵巻』製作時期を、西行歿よりは七十年程後の文永頃まで、あるいは更に年代を遡って西行歿よりは三十年程後の承久頃までとの推定が与えられている。

私は「絵巻」が前で「物語」が後という仮説を求めた。そして「物語」の成立を西行歿よりは六十年程後の、建長頃までと考えてみたところから、やはり「絵巻」製作時期をこの建長以前という形で考えねばなるまい。

白畑よし氏は「承久以前の即ち鎌倉前期」と推定されている。となれば西行歿よりは約三十年ぐらいで西行の物語が成立したということになる。仮に更に年代を下げて「絵巻」の成立を西行歿よりは四十年から五十年ぐらいと考えるとする。そこでこうした「絵巻」という形での西行の物語が普及するうちにも、巷間における様々な西行伝説が参考となり、ある時期に一人の人物により『発心集』の説話もとり入れられて今見るような「西行物語」の形がまとめられたと仮定す

る。そうした西行の物語の成長の期間は十年から二十年ぐらい要するものと考えれば、いさゝか短絡的な考え方であるが今見る「西行物語」の形が成立する時期を、大体西行歿より五十年から六十年ぐらいと考えられるのではないだろうか。即ち建長頃までに「西行物語」が成立と見てよいのではないかと私は考えた次第である。

#### 六、「絵巻」と「物語」の性格の差

では一体徳川本・大原本『絵巻』二巻の元首尾揃った「絵巻」の内容はどのようなものであったろうか。一体どのような理解したらよいであろうか。繰返し述べるように現存『絵巻』二巻は残欠絵巻であり、その全容が分らない。前節で述べてきたような考えの上で、あくまで二巻の内容で想像する訳であるが、私はこの初期「西行物語絵巻」は、『新古今和歌集』入集歌数第一位の歌人西行法師の作歌遍歴の物語であったろうと考えるのである。

鎌倉時代（十二—十四世紀）の絵巻物の特質は、複雑な文化や社会相を反映して多様な内容・様式をとり、言わば絵巻物流行期であるとされ、特に鑑賞方面・宗教方面に二大別され、前者には公家文化を背景とする中古文学のロマンチックな思潮をあらわす公家階級の懐古趣味・古典崇拜の所産とみるべき物語類の作品、和歌類の作品の外に、説話類・戦記

類・記録類に作品が分けられ、また後者は宗教界の活発な革新運動・革新の機運にともない、神仏の靈験を語る縁起類、宗祖の業績などを宣揚する如き高僧の伝記を描く伝記類の作品が作られたという(注11)。

「西行物語繪卷」は出家者西行の生涯を語るもので、その点では後者の伝記類に入る、例えば『一遍上人繪伝』のごとく宗教者の伝記と同じものかもしれぬ。しかし西行は一宗の宗祖ではない。その繪伝製作の意図が違うということならば、当然その享受者層に位相があると思う。特に現存二巻の『繪卷』は和歌を折り入れた叙述方法が中心となって、つまり作歌遍歴を物語る点、『一遍上人繪伝』とは印象的にも相違を感じる。現存二巻の『繪卷』は大和絵の典型とされており、その点からも私は、前者の鑑賞方面の「繪卷」として、公家文化を背景とする物語類に入る作品ではないかと考えるのである。前に引用した白畑よし氏のご見解にあるように、「繪卷」は初め宮中を中心とする公家の階級を享受者層として、大和絵正統画系の画家の手で製作されたものとする、そこに登場する西行像は、まずは公家社会の文化意識を基底とする創造契機によって生み出されたものと思われる。私は現存二巻の『繪卷』の元首尾揃ったものは、繪卷製作の伝統に従う四季繪・名所繪の性格を兼ねた繪卷と思うのである(注12)。大原本『繪卷』に見る、吉野山を春、桜を求めて

分け行く西行の繪、熊野道やがみ王子神社の桜を賞で、忌垣に自作歌を書きつける西行の繪、千里の浜の描写、大峯を下り葛城山を望む里で行者達と別れる西行の繪等、全て当時の人々には味い深いものであったと思われる、こうした四季折々、名所夫々の風致と共に西行の作歌遍歴の姿を語るものとして、西行の繪伝が公家の文人達を中心に享受されていたと思う。

そこで私は初期の繪伝は歌人西行法師の発心修行物語であり、その修行は聖の修行というよりも、作歌遍歴としての意味合いが強い、即ち作歌修行といつてよいものと考えたのである。

西行には二つの側面がある。当然歌人西行という側面を持つが、他に「聖」「上人」と呼ばれる宗教者としての側面もある。

現在我々の眼にする「西行物語」も、この二つの側面を以って主人公像が語られる。特に鴨長明の『発心集』の説話(「西行女子出家事」「郁芳門院侍長住武蔵野事」の二話)を「西行物語」は構想上に取り入れている。この『発心集』の説話は歌人西行という側面を全く伝えず、即ち聖西行の説話となっており、こうした説話を取り入れるということは、そこに語られる聖西行の像をそのまま受け継いでいるということでもある。つまり「西行物語」は歌人西行の作歌遍歴の

物語であると共に、聖西行の法臘五十年の修行物語でもある。

主人公晩年の述懐として、

はるかに山のほらに住して、観念の心を八功德池に澄まし、常に安養界をねがひ、後に諸国流浪の頭陀、山林の行を立て、法花般若真言念仏、人の心に随ひてすゝめ、一切衆生一仏浄土の思をなして、慈悲の袂をしぼり、忍辱の衣を染めて、西に行く心を忍びて、五十余年を過ぎぬる夢、年々歳々花相似たり。歳々年々人おなじからず。人一日一夜をふるに八億四千万の思あり。これらの罪を懺悔せむ為に、三十一字のことはを詠じ、仏道修行にあづかる故に、東を出て西に流るゝ水を見ては、浄土へ参る道のしるべと思ひ、春の花、秋の紅葉みな風にさそはれ、夏の空蟬、冬の雪もの云はずして生死無常を教へ、心すまぬ時もなくして、齡すでに八十になりて——下略

（文明十二年奥書『物語』）

とある。この述懐の言葉に「西行物語」の主人公像は明瞭に示されているであろう。またこの述懐は、「西行物語」作者の实在の西行をめぐる認識が集約的に語られている部分であると思われる。

このように「西行物語」は、歌人であり聖である西行の発

心から往生までの法臘五十年の人生営為を語るものであるが、果して徳川本・大原本『絵巻』二巻の元首尾揃った絵伝が、こうした西行の二つの側面をどういう形で語っているかということが問題となる。

私はこの二つの側面の相対的な意味合いで、前に述べてきた如く「絵巻」は初めその歌人としての側面を強く語るものであったと考える。そして現在我々が眼にする「西行物語」はもう一つの側面を強く語る、即ち聖西行の物語というべきものであり、ここにおいて私は、「絵巻」と「物語」の性格の差というものを考えたいと思う。今見る「物語」が、聖西行の発心修行往生談としての性格を強くする（明瞭にする）のは、やはり長明の『発心集』の説話を構想上にたねとして取り入れたためであろうと思う。また巷間の西行伝説を取り入れ、その偶像形成を促す西行憧憬者・支持者の意識を汲みとり、また作者自身の共感・実感の尺度の上で、「捨人」の像を鮮明に語るところに、今見る聖西行の物語という性格が強くなってきたのではないかと思う。

以上私は「西行物語」の成立において、初め「絵巻」が成立、後に詞が独立し、その詞に新しい構想にともなう詞章が増補されて、現在我々が眼にする第一類系の「物語」の形が出来たと考えたところから、「絵巻」と「物語」の性格の差というものを考察した。勿論現存二巻の『絵巻』は残欠絵巻

であり、その元首尾揃った絵、伝の内容が分らぬ以上、この「絵巻」と「物語」の性格の差というものは、「物語」が後と見る仮説の屋上屋というものであろう。仮に今見るような「物語」の形が前に成立、後に絵を得て「絵巻」が出来たという見方に立っても、結果として私はある程度まで如上の「絵巻」と「物語」の性格の差というものを考えることが出来るのではないかと思うが、こうした仮説を立てる上で、その論述の内容が根本的に違ってくる。

徳川本『絵巻』と文明十二年奥書『物語』における西行妻女の像の相違から、私は一応「物語」を後とみたいと思ひ、以上の性格の差というものを考察したのである。

### 七、「物語」作者の獨創性

私は西行の物語は、第一類系において初め「絵巻」で成立、後に今見るような「物語」が成立したと考へたところから、前節で「絵巻」と「物語」の性格の差というものを考察せざるを得なかつた。そしてこの「絵巻」が前で「物語」が後と考へた以上、更に新しい問題を考へねばならぬ。

即ち「物語」の作者の獨創性についての問題である。まずその作者像を考へねばならぬ。

「絵巻」が前に成立したとすると、そこに「絵巻」製作の方法というものが考へられる。その方法とは、即ち西行の歌

を折りこみ物語の詞を叙述する、詞章叙述の方法である。「西行物語」を眼にすると、その構想の上で巧みに西行の歌、その詞書を利用して詞章をまとめ上げてゆく、その手法の見事に驚ろかされる。

ところで伊藤嘉夫氏は

前に出した西行物語の中に、新古今集に入集した歌のほとんど全部を収めるといふのは尋常のことではない。西行は新古今入集作者中の歌数で最高九四首ある。そのうち九一首が西行物語に入っている。けして偶然のことではない。物語の作者は、この物語をただ西行の伝を作ろうとしただけではなく、西行新古今入集歌集としての実質をもそなえさせようとしたものであらうと思われる。

——中略——思うに、この物語の作者は、まず新古今入集西行の全歌を集め、これによって西行物語を構成しようとして考へたのであらう。

と述べられている(注13)。

やはり西行の物語は『新古今和歌集』の入集歌ばかりで叙述することは出来ない。西行の家集から更に他の歌や詞書を構想に従ひ巧みに収容につとめている。六家集本山家集や異本山家集に見える歌が物語に収容されている。伊藤氏は「物語」に収容されている西行の歌一九〇首について(注14)、『新古今和歌集』入集歌の九一首、六家集本に八四首、異本山家

集に五首、夫木和歌抄に二首、宮河歌合に一首（十五番右）、御裳濯河歌合に二首（一番左・二番左）とそれぞれの所在を求められ、他の五首は今のところ何れの書にも見えぬとされている。

私はこうした西行の歌の巧みな收容の程から、やはり『新古今和歌集』や西行の家集を眼にする人物でなければ出来ぬ手法と思ひ、そこで「西行物語」の作者は西行の歌に精通したかなり構想力のある人物と考へ、序に触れに拙稿においてもこうした作者像を考へてきた。しかし「絵巻」が前で「物語」が後とする上では、作者像に変更はないがその考へ方を少し訂正しなければならぬと思われる。

前に述べたごとく西行の歌を巧みに利用して物語の詞章を叙述するという方法が、既に「絵巻」製作の上で試みていることであるならば、こうした方法は決して「物語」作者の独創ということは出来ないであらう。「絵巻」が前に成立している、後にその詞章叙述の方法を受けついで、「絵巻」の詞に新たな構想にともなう詞章を増補して、今見る「物語」が成立したとすると、詞章叙述の方法は作者の独創と言えないが、新たな構想を立てて、西行の歌を收容することに、作者の力量を考へてもよいのではないだろうか。徳川本・大原本『絵巻』二巻は繰返し述べる如く残欠絵巻であるから、その元首尾揃ったものに、例えば『新古今和歌集』入集九四首の

うち何首を收容しているかは全く分らない。その上私は現存二巻の元首尾揃った「絵巻」が伊藤氏のご指摘される所々の「物語」に收容された一九〇首を同じく收容しているとは思われぬ。となれば「絵巻」に收容した歌の他に、作者は西行の歌を構想に従い收容につとめていることになり、その点ではやはり作者は西行の歌に精通した人物ということになると思う。ただ前に述べたように、こうした詞章叙述の方法は作者の独創であるという考へを訂正しなければなるまい。

徳川本・大原本『絵巻』二巻の詞章を例えば文明十二年奥書『物語』の詞章に比較すると、西行の歌を收容する部分は殆ど同じといつてよい。従つて私は二巻の他の今は伝わらぬ巻の詞章も、西行歌をもとに叙述する部分は文明十二年奥書『物語』と大体同じよになつていたと思う。しかし文明十二年奥書『物語』に、徳川本・大原本『絵巻』の元首尾揃つていた「絵巻」にみる歌以外の歌をも收容している部分があれば、その部分が「物語」作者の増補した新たな構想ということになるであらう。

徳川本・大原本『絵巻』二巻には二七首の歌がある。同じ部分を文明十二年奥書『物語』に見ると（前に述べた大原本『絵巻』の脱落部分を除いて。更に大原本『絵巻』には第一段の詞章が欠けているのでその部分も除く）同じく二七首あるが、それぞれ一首づつ出入する。その相違を見ると、大原

本『繪卷』の第五段（第四節に引用）にある

すゑの代もこのなけきのみかはらすとみしゆめなくはよ  
そにきかまし

の歌が、文明十二年奥書『物語』では

登蓮法師人々を勧めて百首の歌あつらへども、否び申し  
て熊野へ到る道、紀の国に千里の浜の海士の苦屋に臥し  
たる夜の夢に見るやう、三位入道俊恵（成力）申してい  
はく、昔にかはらぬことは和歌の道なり。これを詠まぬ  
事をなげくと見て、驚きて詠みて送りける歌に、この文  
を添へて、

和光同塵の垂跡 平等利生の方便 八相成道の終 般  
若妙法の法施 真言秘密の法楽 臨終正念に往生せむ  
極楽の為と礼拝をして日数つもる間、御山千手の滝に入  
堂する程に、——下略（傍線筆者）

とあって、「すゑの代も」の一首が見えぬ。ここに作者の手  
が入ったと考えることが出来、この点において私は初めに  
「繪卷」が成立、それをもとに「物語」がまとめられる上  
で、こうした相違が生じたものと考えたい。但し、同系の一  
本『西行一生涯草紙』には「末の世も」の一首があり、文明  
十二年奥書『物語』に見る「和光同塵の垂跡」以下の歌に添  
えたという文がない。この点では徳川本『繪卷』に近いが、

——夜の夢に見るやう、別当湛快が、三位入道俊成に申

「西行物語」の成立時期をめぐって（坂 口）

し云ふ、昔にかはらぬ事は和歌の道なり。（傍線筆者）

とあって、他の詞章と違う。今、文明十二年奥書『物語』と  
『西行一生涯草紙』の前後関係を定かに論じられぬ。私は傍  
線部の相違から一応文明十二年奥書『物語』が元の形をとる  
と見て、徳川本『繪卷』との比較を試みている。

また文明十二年奥書『物語』で、西行が出家の決意を固め  
るため縁より幼い娘を蹴落す話を第五節に引用したが、その  
引用の省略した部分（以下「一内」）に

この娘の泣き悲しむを見ても驚く気色のなかりけるこそ  
あはれに見えけれ。

「露の玉消ゆればまたも置くものをたのみもなきは我身  
なりけり

十五夜の月の半になるまで涙をおさへて思ふ程に、万法  
心のうちに更に別の法なし。人界に生るゝことは梵天よ  
り糸を下して、大海の底にある針に貫かれむよりもかた  
し。仏法にあはむ事は一眼の龜の浮木の孔にあへるが如  
し。このたび出家をとげて仏道に入らむと思ふ人木石に  
あらずと説けり、麻の中のものもぎはためざるにゆがま  
ず。松にかゝれる藤は千尋のぼる。梅檀の林に入るとも  
がら心も必ずかうばし、勿利天園には勸喜の色をふく  
み、蓮花世界の鳥は妙法の文をさえづる。されば驕慢の  
心をとどめ食欲の思ひを忘れ、邪見殺生の罪をつくら

ず、飲酒妄語の戒をたもちて、念仏読経怠らず、仏にならむと思ひて涙を流す程に、「西の山は近く月傾けば、今を限りと——下略

とあって、「露の玉」の一首が見える。この部分を徳川本『絵巻』に見ると、前に引用しているように

みみにもきゝいれすして中に入ぬ〔絵〕されは名利の世をのかれ生死のきつなをはなれて戒行を具足して念仏往生のみちにおもむかんと思ふ月も西のやまのはにかたふきぬれはいまはかきりと——下略

とあって、「玉の露」の歌が見えない(『西行一生涯草紙』にも「露の玉」の一首、仏法にあはむ事以下の譬え話があるが、その詞に若干の相違が見える)。私はここにおいても、「絵巻」が前で「物語」が後という考えの上で、その詞章の相違を理解したいと思うのである。しかししてこの「玉の露」を含む一節が、前に述べた如く作者の増補した新たな構想と考えられると思う。ここに「物語」の作者の獨創性を指摘してもよいのではないだろうか。

さて「絵巻」が前で「物語」が後と考えると、更に作者の獨創性を問題としなければならぬことがある。それは虚伝を語る西行往生談のことである。

私は序において「物語」は巷間の伝説を取り入れて、その西行支持の意識をも汲みとり、作者は「物語」の主人公造形

をはかったと述べてきた。こうした西行伝説の一つに、建久九年二月十五日、東山雙林寺にて往生という虚伝を含めて考えてきたのである。

前に述べたように現存二巻の『絵巻』は残欠絵巻であるから、その元首尾揃ったものに西行往生談があったか否か、あったとして何と西行の入寂を伝えているか全く分らない。一応虚伝生成時期の下限を『古今著聞集』成立の建長六年に求めてみたが、上限の、即ち一体いつ頃から雙林寺入寂の伝が語られるようになったかということは全く分らない。虚伝生成以後に「絵巻」が製作されたならば、「絵巻」に虚伝を語る西行往生談があることも充分考えられるであろう(但し西行妻・娘の天野別所往生談のないものとして)。今こうした往生談があったか否か分らぬという問題に「物語」作者の獨創性を考えるのは疑問であるが、一応考えておきたい。

もし「絵巻」に虚伝を語る西行往生談があったとすると、即ち後に成立する「物語」の同じ往生談は作者の獨創ということとは出来ない。しかしこの虚伝を西行の物語に取り入れるということ自体が作者の獨創ではないにしても、やはり作者の獨創性というものはあろう。それは西行入寂の虚伝における聖西行の見事な往生に憧憬・共感を示す後世の西行支持の意識を汲み取り、「物語」の主人公造形をはかったというところにあると思う。そこで前に引用した主人公西行の述懐が



作者によって叙述されたのではないかと思う。あるいは「絵巻」にも西行晩年の述懐が書かれていたかもしれぬ。しかし「物語」の述懐は聖西行の言葉である。そうした表現を取り得る点に、私は作者の獨創性を考えてみたいと思う。

「絵巻」が前で「物語」が後という仮定の上で作者の獨創性を考えると、更に触れておかねばならぬことが多くあるが、一応以上の点にとどめたい。作者の獨創性を考える上では、特に『発心集』の説話をたねとして取り入れ西行の物語全体の構想と関わらせている点に、その意義を求めたいと思うのである。

## 八、おわりに

以上現在我々が眼にするような第一類系の「西行物語」の形の成立をどのように理解したらよいかということを中心に、その成立時期、「絵巻」と「物語」の前後関係について考察してみた。

本稿全体が仮説に仮説を重ねる形になったが、「西行物語」の成立時期、「絵巻」と「物語」の前後関係を考える上で、以上の形をとらざるを得なかった。例えば徳川本・大原本『絵巻』二巻は残欠絵巻であり、その元首尾揃ったものの内容は全く分らない。あくまで想像・仮説の上でその内容を理解しなければならぬ。本稿では徳川本『絵巻』と文明十二年

奥書『物語』における西行妻女の像の相違というものから、長明の『発心集』「西行女子出家事」の増補と考え、また西行の物語に天野別所のことと語られる所以という問題も併せて、「絵巻」が前に成立、後に現在我々が眼にするような第一類系の「物語」が成立と考えてみた。

勿論こうした仮説と逆の、即ち今見る形の「物語」がまず成立、後に絵を得て「絵巻」が製作されると考えることも出来よう。またそうした上で西行妻女の像の相違を考察し得ると思うが、私は上記の如く「絵巻」が前に成立と考えてきた。こうした西行妻女の像の相違という点のみ、「絵巻」と「物語」の前後関係を論じること自体問題とは思いますが、今のところ特に問題とすべきことといえ、やはり西行妻女の像の相違ということであろうと思われ、そこでこの点を中心に私の考えをまとめてみたのである。

本稿には尚不備が多く、特に美術史方面から「絵巻」のこゝとを更に考察せねばならなかった。「絵巻」が前で「物語」が後と考える上で、更に多くの問題を残している。例えば『とはすがたり』の伝える「西行が修行の記」、『沙石集』梵舜本の伝える「西行ガ絵」等の二つの「絵巻」をどのように考えたらよいかということもある。今後共「西行物語」について考察をすすめてみたいと思うが、大方のご教示、ご批判を賜われれば幸いである。

補注

注1、坂口『西行物語』考(駒沢国文、第13号)

注2、五来重氏著『増補高野聖』一三一頁・一六一頁、他にわたる五来氏のご考説。

注3、福田晃氏著『軍記物語と民間伝承』五二頁に、福田氏は西行雙林寺入寂の伝に触れ、「双林寺に寄宿した、後の念仏聖たちの言い立てたことが思われる」と述べておられる。

注4、伊藤嘉夫氏『西行物語』のたねとしくみ(跡見学園国語科紀要12)、伊藤氏はA・B・C類とされる。

注5、他に川瀬一馬氏は「西行物語の研究」(『日本書誌学之研究』所収)において、増補成長の順として第五類まで伝本を分類されておられ、伊藤氏の分類がいえば、第二類系に入る静嘉堂文庫蔵、仏阿仏尼筆「西行物語」を原形とされている。他に松本隆信氏は「室町時代物語現存本簡目録」(『斯道文庫書誌叢刊之二』所収)で、川瀬氏の分類をもとに四類に分けておられるというが、私は未見である(版本文庫6、「西行物語——正保三年刊——」の桑原博史氏の解題より)。私は第一類系が西行出家後吉野熊野大峯修行の話をとるのに、第二類系はこの話がなく出家後伊勢へ行くと語っており(第三類は行程が逆で、住吉から大峯・熊野と語っている)第一類系が大原本『絵巻』の内容と同じという点から、また西行の娘を養女にした冷泉殿の父を、第一類系は九条民部卿としているのに対し、第二類系は九条刑部卿としているし、冷泉殿の弟のむかえばらの姫君の婿

を第一類は播磨の三位としているが、第二類は伯耆の三位としており(第三類は第一類と同じく伝えている)、第一類系が『発心集』の「西行女子出家事」の伝に忠実な点から、伊藤氏の分類に従いたいと思う訳である。

注6、谷山茂氏「西行の人と歌」(『日本絵巻物全集』第十一巻、「西行物語絵巻・当麻曼茶羅縁起」所載)

注7、白畑よし氏もこの点に触れ、「この場面には詞書が失われているので、断定は出来ないが、徳川本の巻の一番はじめにあったのではないかと推される」と述べておられる。(『日本絵巻物全集』第十一巻、<sup>五又</sup>図版解説、四九頁)

注8、国会図書館に「西行物語全」と題した大原本『絵巻』の模写絵巻がある(亥・一九九)。「養川院所蔵」「住吉画所」と書かれており、「住之江文庫」の印がある。この絵巻が模写された年代は分らないが、この模写絵巻自体第五段と第六段の間が欠いて写されている。大原本『絵巻』が今見る形になった時期は更にさぐる術がない。

注9、石田吉貞氏「西行の家族的周辺」(学苑、通卷二二六号)

注10、岡見正雄氏「説話・物語上の西行について——一つの解釈——」(『日本絵巻物全集』第十一巻所載)に、岡見氏は後深草院二条著『とはすがたり』に伝える「西行が修行の記」、無住著『沙石集』の梵舜本が伝える「西行ガ絵」に触れ、「そして、この物語絵は或いは比丘尼、世鏡抄に云う草紙比丘尼の様なものの手を経て成長するという事もあったのではないか。それが西行の説話・物語の中に天野の別所が出て来る所以なので

はあるまいか。」と述べておられる。示唆的なご見解と思われるが、私は本稿で「絵巻」が前で「物語」が後とし、「物語」の成立を建長以前と考えてきたので、建長以後流布の「絵巻」の問題も含め、この点更に考えてみたいと思う。

注11、『日本の美術』No.2、奥平英雄編「物語絵」、〃絵巻の展開―流行期〃よりまとめた。

注12、『日本の美術』No.49、白畑よし氏編「物語絵巻」、〃物語の鑑賞・西行物語絵巻〃に「この絵巻は、さすらいの歌人西行の伝記を題材にしながら、やまと絵の本領である山水の雄大な趣をふんだんに表現している。そして題材的にも四季と名所を結びつけて、伝統的に構成していることがうかがわれる」（四八頁）とある。

注13、注4に同じ

注14、注4に同じ、伊藤氏は第一類で史籍集覧本、即ち『西行一生涯草紙』を「比較的原型に近いものと思われる」とされる。

そこで氏は「史籍集覧本に部分的に文明本を校した本文を仮に項をわけてその項ごとに歌の所在を示」され、歌数計二〇九首のうち一九〇首が西行の歌であることを紹介されている。

— 50・10・5 —